

「イスラエル建国史」

26 英委任統治下の パレスチナ 3

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

パレスチナにユダヤ民族のナショナルホーム建設を認めたバルフォア宣言により、ユダヤ人のパレスチナ移住は加速した。だが、パレスチナ全土を領土とするアラブ人国家の建設を求めるアラブ人の反対に会い、各地でアラブ人の暴動、テロが発生する。こうした脅威に立ち向かうため、ユダヤ人社会では自衛組織が結成され、イスラエル国防軍の前身である「ハガナ」もこの時に誕生する。そのような中で、1922年に国際連盟がパレスチナ委任統治令を発表し、ユダヤ民族のナショナルホーム建設が国際的にも公式に承認されることになった。

バルフォア宣言を受けて

建国史上、バルフォア宣言発表後国家再建に最も重要な役割を果たしたのが、ユダヤ機関（Jewish Agency）である。この名称が初めて登場するのは、1922年。国際連盟がだしたパレスチナ委任統治令の第4条である。復習しておく、「ユダヤ民族のナショナルホーム建設と、パレスチナのユダヤ人社会の権益に影響する経済、社会その他の課題上、パレスチナ政府に助言し協力する公的組織として、適切なユダヤ機関（Jewish Agency）の存在を認める」とある。

適切なユダヤ機関というのであれば、WZO（世界シオニスト機構）がそうである。しかしシオニスト達は別の組織をつくった。固有名詞としてのユダヤ機関（Jewish Agency）である。アルファベット表記では定冠詞がつき、頭文字は大文字で、独自の存在である。

新組織設立の狙い

何故世界シオニスト機構ではいけないのか。

バルフォア宣言の発表に伴ない、ワイツマンやソコロフを初めとするシオニスト機構の幹部達は、ナショナルホーム建設を加速化するのを感じていたが、建設を推進するための政治的バックアップと資金の裏付けは、シオニストだけでは無理であった。

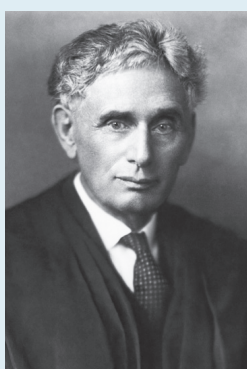
シオニストとしてメンバーになって

いなくても、ロシア、東欧のユダヤ人同胞の窮状を憂慮する人なら沢山いた。更に、バルフォア宣言の発表で国家再建の夢が一步前進したと考え、希望を託す人も増えた。この人達に資金集めと政治支援の面で協力を求めるのである。

アメリカの現状

ブランダイスの辞任

シオニズム運動の軸足はロシア・ポーランドから英米へ移り、ユダヤ人社会の政治的影響力と献金能力からみて、今やアメリカに重点が移りつつあった。



ブランダイス

しかし、アメリカのユダヤ人社会がシオニズム支持で結束していたわけではない。ワイツマンと一線を画したブランダイスは、1921年開催のアメリカ・シオニスト機構の総会（クリーブランド会議）で、アインシュタインを伴って来たワイツマンの世界シオニスト機構代表団と正面衝突を演じ、改革派ラビのステファン・ワイズ（1874～1949）、最高裁判席判事F・フラン克福ルター（1882～1965）等の有力者と共に辞任した。そして独自にパレスチナ経済団体（PEC）、パレスチナ寄付基金（PEF）を設立して、



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

パレスチナのユダヤ人社会の建設事業に貢献した。

募金活動で競合するジョイント

献金キャンペーンの面でアメリカのシオニズム運動の最大のライバルが、ジョイントであった。ロシア、東欧で困窮する同胞を支援し、1924年にはソビエト政府の協力を得て、クリミア半島に大規模農場地帯の建設（アグロ・ジョイント）を発表し、1925年に3年間で1500万ドルの募金を行なうと発表した。

衝撃をうけたアメリカのシオニストは、いくつか個々に行われていた献金キャンペーンをひとつにまとめ、1925年9月に統一パレスチナアピール（UPA）をたちあげ、11月から500万ドル募金を目標にキャンペーンを開始した（ジョイントとの共調が模索されたが、うまくいかなかった）。このキャンペーンでUPAは、目標額を達成したが、その後役割をケレン・ハエソッドに引渡すのである。

実力ナンバーワンのアメリカ・ユダヤ人委員会

当時アメリカで一番実力のあったアメリカ・ユダヤ人委員会は、似たような名称のアメリカ・ユダヤ人会議より歴史が古く、1906年の創立である。ユダヤ人の市民権、宗教的権利の保証を運動の目的とし、人権差別や宗教的偏見と戦ってきた。パレスチナのユダヤ人開拓村に対して慈善事業を行なっていたが、民族国家の再建には反対していた。それが、バルフォア宣言の発表で、シオニズム運動を前向きに考えるようになっていた。

シオニスト kongress の決議

ワイツマンらが、ユダヤ人社会が総力を挙げたかたちをとり、運動を強力に推進するために考えたのが、シオニスト（WZO メンバー）と非シオニスト（ユダヤ人社会の有力者、著名人）が半々で参加する新しい組織の設置である。確かに WZO も一種のユダヤ機関（a Jewish agency）に違いないが、非シオニストも加わったものであるから、拡大という言葉を入れ、定冠詞付きで頭文字を大文字にする。即ち、固有の存在としてのユダヤ機関（略称 JA）の発足である。

この構想は、1923 年 8 月カールスバート（現チェコのカルロビバリ）において開催された、第 13 回シオニスト kongress で提案された。しかし、ジャボチンスキーらは、シオニズムの精神が稀薄になると猛烈に反対した。機構内部の調整と非シオニスト団体に対する参加呼びかけと説得工作に時間がかかり、この構想

が陽の目をみるのは、6 年後である。

1929 年 7 月 29 日から 8 月 10 日まで、スイスのチューリッヒで第 16 回シオニスト kongress が開催され、提

案が採択にかけられた。世界各地から集まったシオニスト代表 305 が投票、賛成 230、反対 30、棄権 45 でユダヤ機関の設置が決まった（ジャボチンスキーは、1931 年の第 17 回 kongress に出席し、代表カードを破り棄てて世界シオニスト機構からの脱退を宣言し、新シオニスト機構をつくった）。

ユダヤ機関の役割と性格

1) 国際連盟、大英帝国、パレスチナ委任統治政府に対するユダヤ人社会シオニズム運動の窓口となる。

2) 事業目的を、(イ) ユダヤ人の移住促進、(ロ) ユダヤ人社会の公有地としての土地の購入と、主に農業要地としての整備、(ハ) ヘブライ語、ユダヤ文

化の振興、普及、(ニ) ユダヤ人としての信仰の保証、とする。

3) 二つの基金のうち、献金運動の中心になるケレン・ハエソッド（建国基金）をユダヤ機関に入れ、土地の購入を中心とするケレン・カエメット（民族基金）は、WZO のコントロール下に残すが、土地購入のツールとしての利用に協力する。

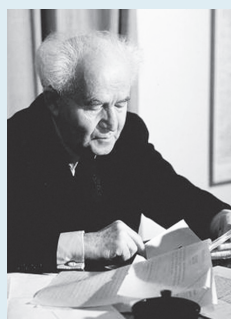
4) WZO とは別個の存在であるが、会長は双方を兼務する（ワイツマンが双方の会長になった。ちなみにワイツマンは、1931 年 7 月から 1935 年 8 月までの期間を除き、1921 年以降イスラエルの独立まで世界シオニスト機構の会長であった）。

5) メンバーの配分は、シオニスト 112 名、非シオニスト 112 名とし、総数 224 名で構成する。非シオニストは有力なユダヤ人社会が存在する 26 ヶ国から選ばれた。アメリカ（44）、ポーランド（14）、イギリス（11）、ドイツ（7）などが主なところである。

有力メンバー

シオニスト 頭角を現したベングリオン

シオニストの主要メンバーには、当然ワイツマンとソコロフ、ウシシュキンが含まれていた。ほかに、テルアヴィヴ・ヤッフォの首席ラビ、ベンチオン・メイル・ウジェル師（1880～1953、後にスファルディ系首席ラビ）、ケレン・ハエソッドの役員シェマリヤフ（シェマリヤ）・レビン（1867～1935）、そしてベングリオンがいた。レビンは、第一次ロシア革命（1905）後ロシア議

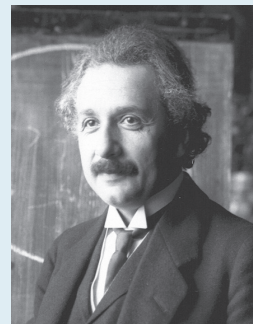


ベングリオン

であった。ベングリオンは名実ともにユダヤ機関の顔となって建国運動に活動する。

非シオニスト 看板役のアインシュタイン

非シオニストのメンバーには、アインシュタイン、フランス議会の議員レオン・ブルム（1872～1950、後に人民戦線を率いてフランス初のユダヤ人首相に就任）、ロスチャイルド家メンバーのような著名人や有力者がいた。アインシュタインは完全に看板である。



アインシュタイン

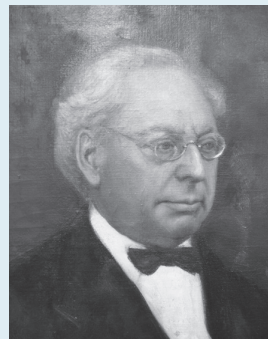
アメリカの公民権擁護派弁護士ルイス・マーシャル（1856～1929）は、ワイツマンが最も頼りにする人であった。パリ平和会議にはユダヤ人



レオン・ブルム

代表者会議の団長を一時ひきうけた。アメリカ・ユダヤ人委員会の創立にかかわり、死亡する迄その会長職にあった人。宗教上は改革派の代表でありながら、保守派の総本山ともいべきアメリカ・ユージュイッシュセミナーの監督委員会議長であった。自動車王ヘンリー・フォードが反ユダヤ論を展開した時は、本人に撤回、謝罪させた実力者である。

マーシャルはユダヤ機関執行部議長となり、会長になったワイツマンは、二人三脚でユダヤ機関を運営していこうと考えたが、マーシャルは発会式の数日後チューリッヒで急死した。本人



ルイス・マーシャル

の死後、シオニスト非シオニストの協力体制は、あっという間に崩れていく。